

# メタファーと認知 2

兼 沢 純 子

## 1. 概念メタファーとメタファー表現

従来、メタファーは、修辞の領域に属し、装飾的なものと考えられてきた。Lakoff & Johnson (1980) は、メタファーが認知の領域に属すると宣言し、メタファーが従来結びつけられてきた詩的言語だけでなく、日常の言語使用にもメタファーが偏在すると主張した。この小論では、メタファーを認知の領域に属するものにとらえた上で、各種のテキストで、メタファーがどのように使われ、それが認知活動にどのようにかかわっているかを、この分野に関連する研究を参照しながら考察する。

われわれの思考や行動が基づいている概念体系の多くの部分がメタファーによって成り立っていて、言語表現が、その概念体系を知るてがかりとなるというのが、Lakoff & Johnson (1980) の主張である。彼らによれば、メタファーは概念に属し、ある言語共同体のメンバーにより共有されている認知様式の一部をなし、そのメタファーは、言語共同体の日常言語の中に広く浸透している。<sup>注1</sup>

ある概念に構造を与えているメタファーは、言語表現上にさまざまな形で反映されている。

- (1) TIME IS MONEY
- (2) SEEING IS TOUCHING
- (3) Don't waste your time on trifles.
- (4) Good eye contact is essential for effective communication.

(1), (2) は概念に構造を与えているメタファーで、直接認知することはできない。(3), (4) は、そのメタファーが言語表現上に反映されたもので、直接認知することができる。これ以降は、前者を概念メタファー (conceptual metaphor), 後者の言語表現としてのメタファー (linguistic metaphor) をメタファー表現と呼んで区別する。また、概念メタファーの例は大文字で表記する。メタファーという言葉は、Lakoff らは、概念メタファーを指して使用しているが、ここでは、特に指摘しないときには、概念メタファーとメタファー表現の両者を含めた意味で用いる。例えば、メタファーの認知といった場合はメタファー表現そのものの認知と共に、概念メタファーの認知も同時に意味する。意識する、しないにかかわらず、メタファー表現の認知は、概念メタファーの認知につながる。逆に言えば、概念メタファーの認知なしには、メタファー表現の認知もありえない。概念メタファーとメタファー表現は別のもので区別しなければならないが、両者は、言語とわれわれの思考、行動を形作る概念とを切り離すことができないという意味で結びついている。

Lakoff & Johnson (1980), Lakoff (1987), Lakoff & Turner (1989) によると、基本的な概念メタファーは、理解されるべき目標領域 (target domain) と、理解するために用いられる起点領域 (source domain) との間に特性の写像関係 (mapping) が成り立ち、目標領域 A の概念が、起点領域 B の概念によりメタファーを用いて理解される ('A is metaphorically understood in terms of

B.) ことで成立している。概念メタファーが、一般に A is B. という、伝統的に隠喩とされてきた形式であらわされているのは、起点領域 B から目標領域 A への写像的配置をあらわしている。これは、一方的にしか働かない。従って、次の二つの概念メタファーは異なるものである。

(5) PEOPLE ARE MACHINES

(6) MACHINES ARE PEOPLE

(5) では、機械の特性が人に写像され、(6) では、人の特性が機械に写像される。

(7) He really turned me off.

(8) This radio has gone dead.

(9) The system unit is the master conductor orchestrating your PC's operation.

(5) の概念メタファーは (7) の表現に、(6) は (8) , (9) の表現に反映されている。

ある概念を別の概念によって理解することがメタファーであるから、メタファー表現は、隠喩、直喩といった、従来比喩の形式として考えられてきたものだけでなく、ある概念を別の概念で理解することができる概念メタファーが基底にあれば、さまざまな文法形式をとることができる。イディオムの中にもこういった概念メタファーに依存するものが多くある。

## 2. テキスト世界認知のメタファー

われわれの思考、行動を形作る概念体系の多くの部分、概念メタファーに依存し、それにより世界の認知の一部が行われているとすれば、そこで認知される世界というのは、テキストの性格により異なる。現実世界を認知させるメタファーもあれば、創造された世界を認知させるために利用されるメタファーもある。この場合、現実世界とはいっても、その世界は言語使用者の外側に客観的に存在するものではなく、あくまでも言語使用者が現実世界だと認知しているものであることに留意してお

かなければならない。前者の現実世界の認知をめざすテキストは、日常言語テキスト、新聞、雑誌などのジャーナリズムテキスト、科学テキスト、後者の創造された世界の認知をめざすテキストは、文学テキスト、広告テキスト、宗教テキストなどが考えられる。各テキストにより、どのような世界の認知がめざされているかは、そこにあらわれるメタファー表現が大きくなてがかりとなる。

### 2.1 文学テキストとジャーナリズムテキストのメタファー

Lakoff & Turner (1989) は、詩的メタファーを取り扱っているが、詩を含めた文学テキストにあらわれるメタファーは、どういう働きを持つのだろうか。われわれが、日常生活において、メタファーで現実世界を認知するように、文学テキストの作者は、自分が造り上げた架空世界を、メタファーを用いて認知し、読者に認知させようとする。文学テキストにあらわれたメタファー表現から、基底にある概念メタファーを求め、その概念メタファーを通して、どのように作者がテキスト世界を認知しているかを求めることができる。もちろんメタファー表現だけで、テキスト世界すべてが認知できるわけではないが、作者が構築したテキスト世界がどのようなものであるかを知る大きくなてがかりとなる。新聞、雑誌などの、事実を伝えることが目的とされる公共的な性格を持つテキストの場合は、現実世界を認知する概念メタファーも、メタファー表現も、文学テキストに比べて常套的なものが多いと予想される。広告テキストの場合は、商品売るという目的に沿った世界を造りあげ、消費者に認知させるためにメタファーが有効に使われる。

Lakoff & Turner (1989) は、基本的な概念メタファーは、詩的言語の基底にも、日常言語の基底にも同じように存在すると主張している。言語共同体の成員が、認知のために広く利用できる概念メタファーは、基本的な限られたものだと思われる。概念レベルにおいて、言語共同体の成員に理解できる常套的なメタファーは、言語共同体の成員の間では、自動的、無意識的に、広く認知様式の中に組み込まれている。メタファー表現においても、この常套的メタファーは、日常言語の中に組み込ま

れていて、さまざまな表現に反映されている。

(10) DEATH IS DEPARTURE

(10) の概念メタファーは、次のようなメタファー表現の基底にある。

(11) She passed away at eighty.

(12) He left this world in peace.<sup>注2</sup>

(11) , (12) は、常套的メタファーの前述の性質を反映しているので、これらの表現を普通はメタファー表現と認識することはない。これに対して、隠喩や直喩は、メタファー表現であると、形態からも認識できる強いメタファー表現である。

詩的メタファーは、基本的なメタファーを、意識的に、拡張し、洗練させ、組み合わせて、常套的なメタファーを越えた独創的なメタファーとして生みだされたもので、詩的メタファー表現がそこから言語として記号化される。詩的メタファーは、認知の基本となるメタファーが特別なのではなく、そのメタファーの操作の仕方が特別なのである。

(13) A BODY IS A BUILDING

という概念メタファーは、日常言語の中に組み込まれて、次のような表現となる。

(14) He is a man of strong frame.

(15) Fred exercised to build up his muscles.

(13) の概念メタファーが、ジョン・ダンの手にかかると、独創的なメタファー表現となる。

(16) O Stay three lives on one flea spare,

Where we almost, nay more than married  
are.

This flea is you and I, and this

Our marriage bed, and marriage temple is;  
Though parents grudge, and you, we'er met  
And cloister'd in these living walls of jet.

Though use make you apt to kill me,

Let not to that, self-murder added be,

And sacrilege, three sins in killing three.

(THE FLEA)

このスタンザは、(13) の概念メタファーを下敷きにして、蚤に聖堂のある特性が写像される。「黒玉色の生き壁」という表現で、蚤の肌と黒玉張りの聖堂の内壁が結びつけられ、蚤は神聖なものとなり、蚤に血を吸われた恋人どうしの血が蚤のからだの中で混じりあって、婚礼をあげたことになる。およそ結びつかない結びつきが、メタファーを通して実現されている。だから、蚤をつぶすことは、聖堂破壊と、殺人と自殺という三つの大罪を犯すことになる。このメタファー利用にあたっては、キリストのからだは神の宮であるというメタファーが、当然連想される。また、この詩には、次のような別のメタファーが複合的にかかわっている。

(17) A BODY IS A CONTAINER  
BLOOD IS LIFE

このように、詩的メタファーは、誰もが利用できる概念メタファーを組み合わせることで、独創的なメタファー表現を生みだし、思いもかけなかった新しい認知を達成させる。詩的メタファー表現は、形態ではなく、概念のとり扱いが常套的でない故に、強いメタファー表現となり、読者の注意がむけられる。

Steen (1994) は、文学テキストのメタファーを読者がどのように理解するかに関して、心理言語学のテクニックを用いた三種類の実験を行い、その結果を分析して、文学テキストにあらわれるメタファー表現をジャーナリズムテキストにあらわれるメタファー表現の間には違いがあることに読者が気づくと主張した。

彼は、文学テキストが、特別な種類の談話として読者に受け入れられることに注目している。文学テキストの

メタファーは、作者により生産されるときに特有の性質を示し、読者が文学テキストを読むときに、その特質ゆえに、文学メタファーに特別の注意がむけられるとしている。彼は、文学の特質として、主観 (subjectivity) , 多価性 (polyvalence) , 虚構性 (fictionality) , 形態性 (orientation to form) をあげ、その特質が文学メタファーにも共通する特質であることが、文学メタファーを文学に特有なものとして読者が判断する根拠になるとしている。

Gentner (1982) は、Steen (1994) によれば、メタファーの概念的構造と伝達の機能に関して、文学テキストのメタファーがより豊かで、科学テキストのメタファーがより明瞭であると分析している。また、文学テキストのメタファーが表現的機能を持つものに対して、科学テキストのメタファーは説明的機能を持つとも述べている。その伝達目的から考えて、科学テキストのメタファーが一価性 (monovalence) を持つと考えられる。これは Lakoff 流に言えば、基底にある概念メタファーでは、一対一対応の写像 (one-to one mapping) がおこなわれている。

文学テキストのメタファーが豊かであるということは、複数のイメージを同時に喚起させることができることと関連がある。しかし、このことが、文学テキストのメタファーが、作者の意図とは異なる解釈がされる一因となる。メタファーの持つ副作用ともいべき現象である。

メタファー表現が、ある言語共同体の共有する概念メタファーを基にして生み出され、理解される言語表現であれば、同じ言語共同体に属する、話し手と聞き手、もしくは、書き手と読み手という言語使用者は、メタファーの認知において、協同作業を行うことになる。文学テキストにおいて、メタファーの理解が、少なくとも一部は読者にまかされているという面から考えると、概念メタファーをもとにして生産されたメタファーは、かならずしも作者の意図どおりに読者によって理解されるとは限らない。話し手はメタファーにより、作者自身が認知している (架空) 世界を、読者にも認知してもらうことを期待して、意識的あるいは無意識的にメタファーを用いるが、読者のメタファーによる世界の認知が、作者の提示した世界の認知へ結びつかない場合がある。

その理由として、メタファーの生産において、起点領域のすべての特性が目標領域に写像されるのではなく、ある概念の一つの側面を示す特性が写像され、他の側面を隠してしまうことが考えられる。Lakoff & Johnson (1980) は、ある概念が、あるメタファーから成り立っているというのは、その概念が部分的にメタファーにより構造が与えられているという意味だと述べ、メタファーが起点領域の別な部分を隠していることを、導管メタファー (conduit metaphor) の例を用いて説明している。

(18) IDEAS (MEANINGS) ARE OBJECTS  
LINGUISTIC EXPRESSIONS ARE CONTAINERS  
COMMUNICATION IS SENDING

(18) は複合メタファーの例で、このメタファーにより、意味が言語表現に盛り込まれ、(導管を通して) 送られるという構造が、言葉に関する概念に与えられる。

(19) How do you put it into English?

(20) The meaning is right there in the words.

(18) の概念メタファーを使う (20) の表現に見られるように、この導管メタファーが、『文脈や話し手とは無関係に、言語表現の中にだけ意味がある』という、現実をかならずしも反映しない部分的な世界認知をさせる結果になる。そして、このメタファーにより、われわれの考えも規制される。

文学テキストにおいても、作者が、ある意図をもって概念のある側面をとりあげて、他の側面を隠したメタファーを用いても、読者によって、起点領域の作者が取り上げなかった概念の側面に注意が向けられ、作者の認知している世界とは異なる世界の認知がされてしまうことがある。前述の副作用である。作者の意図どおりにメタファーが効果をあげるかどうかは、常に保証されているわけではない。常套的メタファーを使えば、ある言語の共同体がすでに共有している認知にたよることができるので、認知において、ずれが生じる確率は低い。死喩や

イディオムはそれが極端まで行ってしまったものと言える。しかし、文学テキストは、独創的なメタファーを利用することで、すでに認知されている世界の再認知ではなく、新しい世界を認知させることを可能とするので、副作用は避けられない。新しい世界の認知とこの副作用は、Steen (1994) が文学の特性としてあげた、主観性、虚構性、多価性とも関係がある。

Steen (1994) は、英語とオランダ語の文学テキストのメタファーとジャーナリズムテキストのメタファーをランダムに被験者に与えて、認知的な言語的、概念的、伝達的特質と、非認知的な感情的、道徳的特質という談話を構成する特質をそれぞれ計る尺度を問う実験をおこなった。その結果、両者の差は、言語表現の慣用性、概念のわかりやすさ、伝達の態度、感情を引き起こす価値、道徳的立場の五つの要因に集約されると分析する。実験結果から、第一に、メタファーの性質が上記の談話を構成する一般的な特質に基づいていること、第二に、わかりやすさと伝達の態度という二つの特質においては、文学メタファーとジャーナリズムメタファーで異なる傾向が顕著にみられると結論づけている。<sup>注3</sup>

Steen (1994) から導き出されるのは、文学テキストのメタファーとジャーナリズムテキストのメタファーの差は、文学とジャーナリズムという談話の性格の差を反映しているということである。例えば、概念のわかりにくさに関しては、文学という談話が、主観的で多価性という特性を持つからわかりにくく、ジャーナリズムという談話が客観的で一価性という特性を持つことが、ジャーナリズムのメタファーのわかりやすさと関連がある。

この実験による分析に対しては、実験結果が実験に用いられた資料に左右される可能性があり、ただちに文学メタファーとジャーナリズムメタファーの間の一般的傾向と断定できないこと、また、尺度を計る設問が妥当なものであるかという二点が今後検証されなければならない。

ジャーナリズムテキストのメタファーは、文学テキストのメタファーに比べて、読者のすでに認知している世界の再認知を利用するメタファー表現を多用する。

- (21) The put-down was like a phaser to the heart.
- (22) And the Trek phenomenon is bursting again like a fresh supernova.
- (23) The mother ship of all TV cult hits seems poised to boldly go where none has gone before.(TIME1994/11/24)

上記の文は、スタートレック現象を特集した記事から抜粋したメタファー表現であるが、いずれも、スタートレックについての知識があり、その世界を認知している読者にとっては、その世界を再認知させるメタファー表現が使われている。この場合、別の表現による言い換えでは同じような効果をあげることはできない。

## 2. 2 宗教テキストのメタファー

文学テキストが、作者が作り上げた世界の認知にかかわるとすれば、宗教テキストは、神と人との関係という視点から見た世界の認知にかかわるといえる。

聖書のメタファーに関して、Tracy (1978) は、新約聖書にあらわれる GOD IS LOVE というメタファーを神の性質を再描写する (redescribe) , キリスト教の根本メタファー (root metaphor) だと述べている。彼のメタファーに対する立場は、対立理論に立つように思われるが、彼によれば、メタファーは、既知の体験的现实を描写するのではなく、再描写するものである。キリスト教徒の世界観は、人間の状況を再描写するルートメタファーに基づいており、それは聖書に記号化されていると Tracy (1978) は主張する。彼のいうルートメタファーは、メタファーのネットワークを作り、言語に記号化されることで、レイコフらの概念メタファーと共通するところがある。彼によると、love という言葉にアガペーとエロスという対立 (tension) が内在し、God と love の間にも対立があるので、God is love. という表現の文字通りの解釈とメタファー的解釈の間に対立関係が存在する。その結果、この表現は、神が何であるかを文字通り語っているのではなく、比喩的に神が何に似ているかを述べているという解釈が成り立つ。

宗教テキストのメタファーが認知する世界の例として旧約聖書の一節をとりあげる。

(24) Johovah is my shepherd; I shall not want.  
He maketh me to lie down in green pastures;  
He leadeth me besides still waters  
He restoreth my soul:(Psalms23. 1-2)

(24) の基底にあるのは、

(25) GOD IS SHEPHERD

という概念メタファーである。これは神という目標領域に、起点領域である羊飼いの属性、羊をよく知り、守り、導くという特性が写像されて、神と人との関係を認知させる働きを持つ。このメタファーは、以下のようなメタファー表現をとり、旧新約聖書の随所にあられる。

(26) Give ear, O Shepherd of Israel.  
Though that leadest Joseph like a flock.  
(Psalms 80.1)  
(27) He will feed his flock like a shepherd, he will gather the lambs in his arm, and carry them in his bosom, and will gently lead those that have their young.(Isaiah 40.11)  
(28) : for he that hath mercy on them will lead them even by springs of water will he guide them.(Isaiah 49.10)  
(29) I am the good shepherded.(John 10.11)

そして、この (25) の概念メタファーは、

(30) PEOPLE ARE SHEEP

というメタファーを派生させる。これは次のようなメタファー表現となってあらわれる。

(31) And we are the people of his pasture, and the

sheep of his hand.(Psalms 96.7)

(32) They shall feed in the ways, and on all bare heights shall be their pasture.(Isaiah 49.9)

(30) の概念メタファーは、人間という目標領域に起点領域の羊の属性、羊が外敵に対して無力で、目先の草にとられ群から迷い出してしまう、羊飼いに従うというような特性が写像されている。遊牧の民であった旧約聖書の時代のイスラエルの人々にとり、(25)、(30) の概念メタファーは神と人との関係をよりよく認知させる力を持ち、言語に広く組み込まれている。

(25) の概念メタファーにも、隠された側面に注意が向けられてしまう可能性がある。Lewis (1940) が指摘しているように、メタファーの意図した羊飼いは羊のことをわかっているという特性のかわりに、羊は動物で羊飼いは実際はわかりあえないという特性が拾い上げられれば、神と人との関係に対する誤った解釈がされるかもしれないし、羊飼いは羊を作りだしたわけではないという側面に気がつくとき、創造主としての神と人との関係を正しく認知されない危険がある。メタファーは文字通りの表現では言い換えることのできない力を持つが、その理解に関しては、諸刃の剣の危険性が存在する。

### 3. 結び

現代言語学には二つの言語観がある。生成理論的言語観と認知論的言語観である。生成理論的言語観は、文法を自律的な体系とみなして、他の概念などの認知体系から独立したモジュールをなすものであると考える。いっぽう、認知論的言語観は、言語表現が意味構造を媒体として人間の認知様式を体系的に反映しているというもので、言語の意味は概念に還元されるという立場をとる。本稿で論じてきたレイコフらのメタファー論は、後者の立場にたち、言語表現にあらわれたメタファー（メタファー表現）が、その基底にあるメタファー（概念メタファー）を媒体として人間の認知様式を体系的に反映していると主張している。言葉をかえて言えば、人間の認知様式がメタファーを通して、テキストの言語表現（語彙

と構文) のなかに体系的に実現され、そのテキスト世界の認知を助ける。

テキストの談話としての特性が、そのテキスト世界の認知のために使われるメタファーの選択に影響を与え、メタファーを通して認知される世界はテキストにより異なるが、そのもとになる基本的な概念メタファーは、言語共同体の成員の認知様式を反映しているの、言語共同体内では同一のものである。そして、メタファーは言語共同体の身体的、社会的、文化的体験に根ざす認知体系にかかわっているの、その認知体系が異なれば、メタファーの生産や理解も異なる。その意味で、メタファーは単なる言語表現の問題ではなく、認知にかかわる問題である。人間一般の認知様式には、言語にかかわらず共通のものと、言語を使用する社会により異なる認知様式があると思われるの、外国語として言語を習得する場合は、表層の言語表現だけでなく、メタファーを通じた認知体系の習得も必要となる。

本論は平成4、5年度の塚本学院教育研究費補助金による成果である。

注

本文中の概念メタファーは、(13)、(17) 以外は、Lakoff & Johnson (1980) から採った。

文中の聖書の引用は The Holy Bible American Standard Version に拠る。

注1. ここでいわれる言語使用者というのは、実は理想化された話者にすぎず、実際の言語使用の場面においては、すべての人が、同じように概念メタファーを使えるわけではない。これは、メタファーの生産においても、理解においても同様である。また、かならずしも、すべての人が同じ概念メタファーのセットを持っているわけではない。これは、概念メタファーが、社会的、文化的に形成されるもので、われわれの身体的、文化的、社会的経験に根ざすからである。

注2. この表現には、DEATH IS REST という概念メタファーも反映されている。この例にみられるように、ある表現の基底には複数のメタファーが相互に働いている

場合がある。

注3. 概念的な難しさとわかりやすさは、独創性と慣用性との相関関係があることも実験から読み取ることができた。つまり、あるメタファーが独創的であれば、わかりにくく、慣用的であれば、わかりやすいということである。このような、各特質間の相関関係は他の面でも見られた。

参考文献

J.M.ソスキース 1992 メタファーと宗教言語 玉川大学出版局

レイコフ・G, M・ジョンソン 1986 レトリックと人生 大修館書店

ジョージ・レイコフ 1993 認知意味論 紀伊國屋書店

犬養道子 1995 聖書を旅する1 中央公論社

兼沢純子 1994 メタファーと認知 大阪芸術大学紀要 No.17

中右実 1994 認知意味論の原理 大修館書店

西山良雄 1990 憂鬱の時代—文豪ジョン・ダンの軌跡— 松柏社

Lakoff, G 1987 Women, Fire, and Dangerous Things, The University of Chicago Press

Lakoff, G & M Johnson 1980 Metaphors We Live By, The University of Chicago Press

Lakoff, G & M Turner 1989 More than Cool Reason, The University of Chicago Press

Lewis, C.S. 1940 The Problem of Pain, Fontana Books

Redpath, T(ed) 1967 The Songs and Sonets of JOHN DONNE, Methueu

Sacks, S(ed) 1979 On Metaphor, The University of Chicago Press

Steen, G 1994 Understanding Metaphor in Literature, Longman

Tracy, D 1978 Metaphor and Religion: The Test Case of Christian Texts, in Sacks, S(ed) (1987)